

## 慶紀逸と『武玉川』(一)

八塚一青

突然ですが、慶紀逸（けい・きいつ）という人をご存じですか。インターネットのウィキペディアで検索すると以下のように紹介されています。

慶紀逸：元禄八年（一六九五年）— 宝暦十二年（一七六二年）は、江戸時代中期の俳人。本名は椎名件人（しいなかずひと）通称は兵蔵、土佐。別号に自在庵、四時庵、硯田舎、倚柱子、自生庵、短長斎、十明庵。出身は江戸。立羽不角、三田白峰、稻津祇空に俳諧を学び、寛延三年（一七五〇年）に句集『武玉川(むたまがわ)』初編を刊行、ついで『燕都枝折(えどのしおり)』を出した。軽妙洒脱な句風でのちの川柳勃興のさきがけとなった。

俳聖・芭蕉は一六九四年に没していますので、芭蕉と入れ替わりでこの世に生を受けました。ウィキペディアには俳人（俳諧師）としか紹介されていませんが、紀逸（後の俳号）こと椎名件人の本職は、幕府お抱えの鋳物師（いもじ）でした。椎名家は江戸開府以来の名門で、紀逸は次男ということもあり本家は継いでいませんが、長男の椎名伊代は江戸日本橋「本町時の鐘」を製作するなどの大きな仕事を任されており、紀逸自身も椎名土佐という名乗りが残っていることから父や兄の製作の手伝いをしていたと思われまます。

紀逸の師系はもれなく芭蕉系統ではありますが、正統な蕉風俳諧というよりは、其角からはじまる江戸座俳諧の色合いが濃い俳諧人生を歩んでいます。紀逸が四十歳近くの頃に、俳諧の宗匠として立机（独り立ち）したことが分かっています。俳諧師としては比較的遅いデビューになりますが、鋳物師ではなく俳諧師としての第二の人生の中で、彼は後世に残る大仕事をやってのけます。それが、寛延三年（一七五〇年）に初篇が刊行された『武玉川』です。『武玉川』は初篇から十編まで刊行後、一区切りしようとしたのですが、あまりの人気のため『燕都枝折(えどのしおり)』と名前をかえて紀逸が亡くなるまで五編刊行されました。

(没後も十八編まで継続)

さて、この『武玉川』です。これはどういうものか簡単に言えば「句の選集」です。当時、俳諧が盛り上がった要因として、得点を競い合うということがありました。俳諧師は、人々が詠み合う句を採点するのも仕事でしたが、紀逸が見た句の中から高得点のものを選んで集めたのが『武玉川』です。

ただし、選集ではありますが、詠み手の名前は残されていません。作品だけが集められた句集です。そのため選者がどのような句を取っているのかが、その句集の評価そのものとなります。

『武玉川』が評価されているのは、当然、選ばれた句の質によります。有名な句をご紹介します。

みどり子のあくびの口の美しき

背くらべ手をやわらかにさげている

俳諧の基本は、五七五(長句)のあとに七七(短句)をつける問答形式でした。この『武玉川』のもう一つの特徴として、短句である「七七」の句もたくさん選ばれていることがあります。「津浪の町の揃う命日」のような衝撃的な短句も掲載されています。

今回は、短句のことについてもお話させていただきます。